

令和元年6月14日現在

機関番号：13601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13194

研究課題名(和文)作家・北杜夫の病跡学研究

研究課題名(英文)Pathography of a novelist Morio Kita

研究代表者

高橋 徹(takahashi, tohru)

信州大学・学術研究院医学系(医学部附属病院)・講師

研究者番号：70313856

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文):以下の2編の論文を発表した。作家・北杜夫と躁うつ病 双極性障害の診断 病跡学雑誌95:58-74,2018。作家・北杜夫と躁うつ病 顕在発症前エピソードと『どくとるマンボウ航海記』 信州大学附属図書館研究8:57-87,2019。第一報において、北杜夫における「躁うつ病」の病名が、現代の診断基準における双極型障害に該当すること、また「混合状態」「急速交代型」の特徴を有していたことを考察した。第二報において、顕在発症とされている39歳前にも気分変動が存在し、『どくとるマンボウ航海記』(1960年:33歳時)の執筆にも躁状態とうつ状態が創作に影響を及ぼしていた可能性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

北杜夫の病跡学研究における初の本格的学術論文・原著論文であり、その端緒を論文掲載という具体的な結果として開けた意義は大きい。また精神医学と人文学の領域横断を試みた点においても、「挑戦的萌芽研究」として大きな意義を持つと考える。北杜夫は、昭和を代表する作家のひとりであり、自身の「躁うつ病」を数多くの作品のなかで記述することで、精神疾患の啓蒙に大きく貢献した作家である。よって北杜夫を学術研究の対象として再評価することは、気分障害をはじめとする精神疾患の啓蒙に役立つものであり、社会の精神疾患に対する理解を深める意味でも社会的意義が大きいものと考えられる。

研究成果の概要(英文):The following two papers were presented. A novelist Morio Kita and manic depressive psychosis; the diagnosis of bipolar disorder. Journal of Pathology 95: 58-74, 2018. A novelist Morio Kita and manic depressive psychosis; 'Doctor Manbo at Sea' in the early works before first manic episode of bipolar disorder. Shinshu University Library study 8: 57-87, 2019.

In the first report, it is said that the disease name of "manic-depressive" in Kita-Morio corresponds to bipolar I disorder in modern diagnostic criteria and that it has the characteristics of "mixed state" and "rapid cyler". In the second report, there is a mood change even before the 39-year-old who is considered to be a manifestation of onset, and the manic and depression affected the creation of the writing of 'Doctor Manbo at Sea' (1960: age 33).

研究分野：病跡学

キーワード：北杜夫 躁うつ病 双極性障害 病跡学 日本文学 精神医学 作家 創作

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

病跡学とは、「精神的に傑出した歴史的人物の精神医学的伝記やその系統的研究をさす(宮本忠雄)」「精神医学や心理学の知識をつかって、天才の個性と創造性を研究しようというもの(福島章)」とされている(日本病跡学会ホームページより)。これまで多くの芸術家や作家、哲学者、映画監督といったクリエイターを対象として、その精神医学的情報と創造性との関連が考察されてきた。特に日本文学においては、近年、高橋正雄による夏目漱石の病跡学研究などが継続的に報告されている<sup>1)</sup>。米国を代表する精神科医のひとりであるアンドリアセンは、生物学的精神医学(統合失調症の脳画像研究など)以外にも病跡学を専門としており、作家における気分障害の罹患率の高さを報告している<sup>2)</sup>。日本の作家では、宮沢賢治や開高健が双極性障害であった可能性が指摘されている。研究代表者の高橋が在籍する信州大学精神医学教室は、これまで西丸四方や庄田秀志、森島章仁といった病跡学を専門とした精神科医を数多く輩出しており、高橋も近年、宮崎駿(映画監督)や伊藤計劃(作家)を対象とした病跡学論文を発表した<sup>3,4)</sup>。

本病跡学研究が対象とするのは、近代日本を代表する作家・北杜夫(本名:斎藤宗吉)(1927-2011年)である。北杜夫は、純文学『夜と霧の隅で』、大河小説『楡家の人びと』、エッセイ『どくどくマンボウ航海記』などの作品で知られ、また自身が精神科医であり、かつ躁鬱病(双極型障害)に罹患していることを公としたことでもよく知られている。数多くのエッセイを残し、そのなかで自らの気分変動の病状を綴っており、作品自体から、多くの精神医学的情報を得ることができる稀有な作家である。信州大学のある松本市は、北杜夫が学生時代を過ごした旧制松本高校があり、『どくどくマンボウ青春期』の舞台として有名である。2015年には、親族から信州大学附属図書館に蔵書の寄贈があり、「北杜夫文庫」が創設された。北杜夫と縁の深い信州大学において、精神科医による病跡学研究を行うことは、精神医学のみならず日本文学研究に大きなインパクトを与えると考えた。

## 参考文献

- 1) 高橋正雄:夏目漱石の原・天才論『漱石全集第21巻・ノート』の「Genius」、病跡学雑誌 82:87-90,2011.
- 2) アンドリアセン・NC:天才の脳科学 創造性はいかに創られるか、青土社,2007.
- 3) 高橋徹, 松下正明:宮崎駿にみる身体感覚・体感体験と創造性、病跡学雑誌 82:75-86,2011.
- 4) 高橋徹, 松下正明:作家「伊藤計劃」 病と創作、病跡学雑誌 89:65-80,2015.

## 2. 研究の目的

北杜夫の作品群(小説、エッセイ)と関連資料(親族の著作物)から、精神症状の経過、病状の特徴と変遷、病前性格などを明らかにし、また創作との関連性を検討する。

本研究の遂行により、精神医学・心理学と人文学・近代日本文学をむすぶ新たな研究領域を創出することになる。また近年、精神科診断基準においては、双極性障害が気分障害から独立し、特に重視されている疾患領域であり、本疾患の理解と啓蒙という観点からも大きな成果が期待できる。

## 3. 研究の方法

北杜夫の作品(小説、エッセイ)、関連著作物(齋藤茂吉、齋藤茂太、齋藤由佳等の著作、北杜夫論評書籍等)を通読・概観し、作品年表とともに、病状変動、躁鬱病に関連したエピソードを図表として整理していく。生育史、病前性格、精神症状と作風との関連、創作時の精神状態、家族史、同時代作家との交流と影響、青年期・中年期・老年期の病状の変遷、治療状況、病状に対するコーピング、環境要因(家庭・親族・同年代作家)などを調べた。

## 4. 研究成果

### 第一報論文

高橋 徹, 松下正明:作家・北杜夫と躁うつ病 双極性障害の診断、病跡学雑誌 95:58-74,2018

抄録 作家・北杜夫(1927-2011年)(本名:斎藤宗吉)は、『どくどくマンボウ航海記』『楡家の人々』『輝ける碧き空の下で』などの作品で知られ、また自身が精神科医であり、かつ躁うつ病に罹患していたことを公にしたことでも有名である。北杜夫を病跡学研究の対象とするにあたり、序論である本稿では、双極性障害と診断することの妥当性を検討した。エッセイ等の資料から躁病エピソードと抑うつエピソードを概観し、DSM-5の診断基準と照らし合わせた。その結果、「双極型障害」と診断した。また特に、初回の躁病エピソードといわれている39歳時から5年間の気分変動に着目したところ、「急速交代型」「混合状態」の特徴を有した時期があったものと考えられた。

第一報では、次項の概観図(図1、図2)を論文内に掲載した。本図により、北杜夫における躁状態の大まかな病状変動(図1) 混合状態と急速交代型の特徴(図2)を図示した。

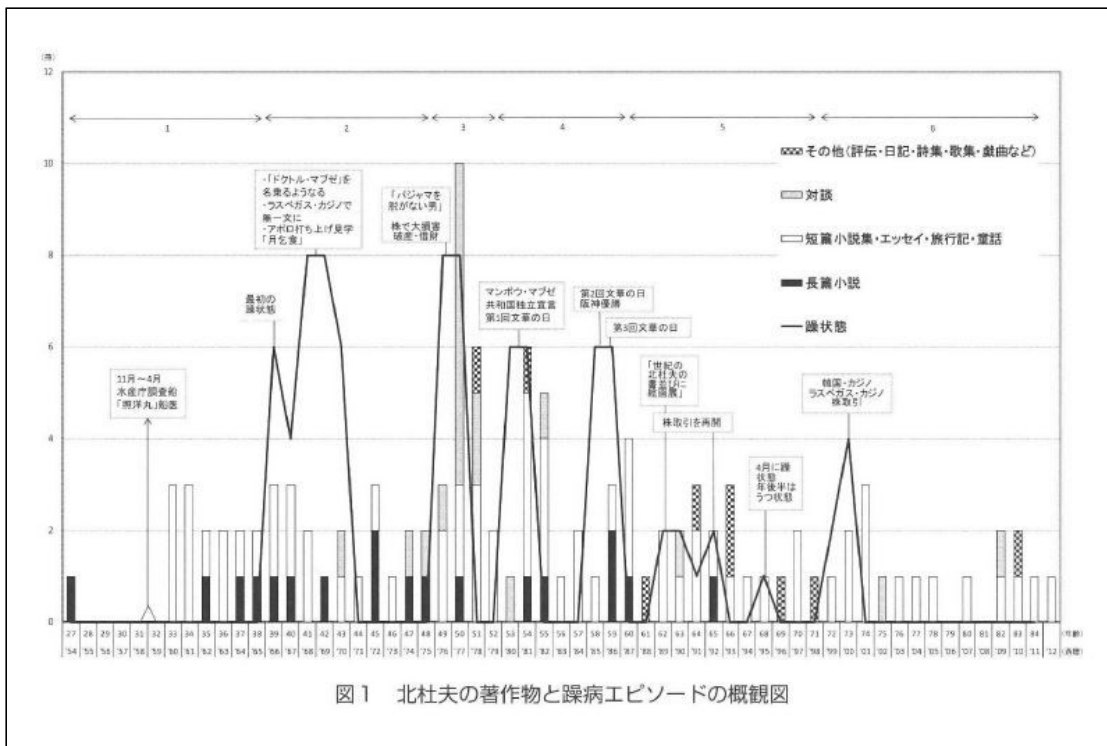


図1 北杜夫の著作物と躁病エピソードの概観図

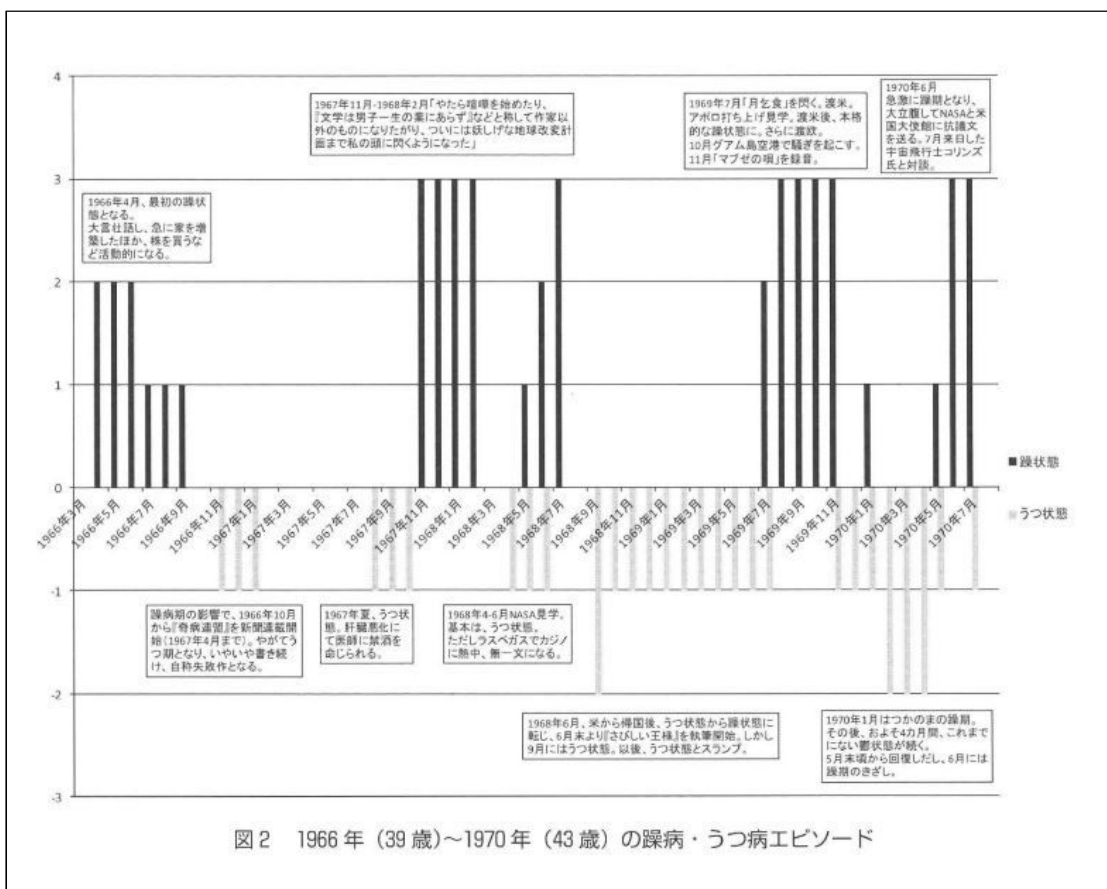


図2 1966年(39歳)～1970年(43歳)の躁病・うつ病エピソード

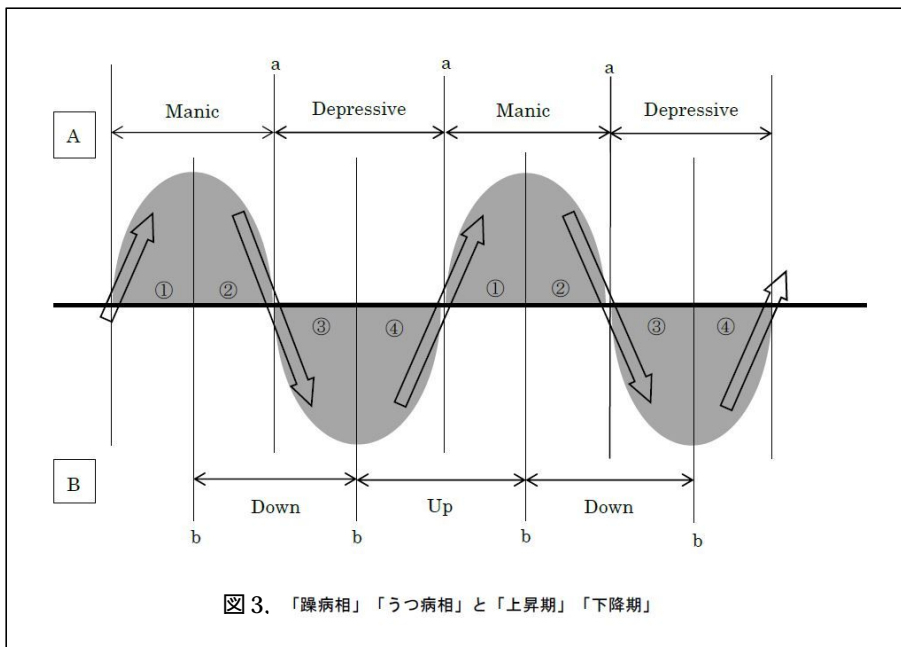
第二報論文

高橋 徹、松下正明：作家・北杜夫と躁うつ病 顕在発症前エピソードと『どくとるマンボウ航海記』 信州大学附属図書館研究 8：57-87, 2019

要旨 作家・北杜夫(1927-2011年)の双極性障害は、39歳時の躁病エピソードが初発とされているが、それ以前の時期にも、気分変動が存在していた可能性がある。本論では、この顕在発症前の時期に焦点をあて、その精神状態と創作との関連性を考察した。辻邦生との往復書簡集を主な資料として、『どくとるマンボウ航海記』執筆前後の1959-1960年(32-33歳)頃の

精神状態を推察した。この時期には既に、躁状態やうつ状態もしくは混合状態を呈していた可能性が高く、これらの精神状態が初期作品の創作に大きく関与しているものと考えられた。特に意欲・活動性のベクトルが上昇に転じる「うつ病相（うつ状態）の後期」が、執筆活動には適した時期であった可能性を指摘した。また同作品が、それまでの文壇にはなかった独自性と新規性を有していることにも言及した。

第二報においては、以下の図表を作成した。図3は躁状態とうつ状態の模式図である。表1では1959-60年の北杜夫の精神状態を概観した。第一報と同様、図示することで、視覚的に理解しやすいように工夫した。



	主な出来事	書籍の記載内容等	精神状態	
1959年	1月	アフリカ神の北回帰線上で元旦を迎える		
	2月	パリで社と再会	「パリでサトリをひらく」	躁状態
	3月		「自信にのみちみてコープンして眠れず」	躁状態
	4月	照洋丸での航海より帰国	意欲・思考力減退、易疲労感、易怒性（憤怒）	混合状態
	5月		「疲れがへべんに出」	うつ状態
	6月		十二指腸潰瘍と診断。「ユウツ」	うつ状態
	7月	『夜と霧の隅で』執筆停滞	「具合悪く、少々やせて、どうも消モウしています」	うつ状態
	8月		食欲低下、体重減少	うつ状態
	9月		「かかってないスランプで、益々、ダメになってしまった」	うつ状態
	10月	10月末『どくとるマンボウ航海記』執筆開始	「デプレシーフ」「スランプ」「オックウ」	うつ状態
	11月		「身体具合もかなり回復」「まだ疲れがち」 最速執筆? (月産200枚?)	
	12月	12月9日『どくとるマンボウ航海記』脱稿	「ウツ病のほうは大体治りました」	
1960年	1月		体重増加	
	2月		「体も本当によくなっている」と行動しはじめた」	軽躁状態
	3月	『どくとるマンボウ航海記』出版		
	4月		「実はこの1カ月、死力を尽くして人力のハテまで仕事しました」	軽躁状態
	5月	『夜と霧の隅で』(新潮に発表)	「殊に五月にボーラクして『マンボウ』の印税がいふんすってしまった」	軽躁状態
	6月	『夜と霧の隅で』刊行。沖繩旅行	「今日は、昔からある昆虫専門店へ行って、いい網やら何やら山買いこんだ」	軽躁状態
	7月	『夜と霧の隅で』芥川賞受賞	「コテンパンにシンケイスイ弱くなった」	
	8月	『シンドバッドの冒険』に脚本で参加	「弱気をだしてしまうのです」	
	9月	『幽霊』刊行。横山喜美子と婚約		

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

高橋 徹、松下正明：作家・北杜夫と躁うつ病 顕在発症前エピソードと『どくとるマンボウ航海記』 . 信州大学附属図書館研究、査読無、8 巻、2019、57-87

高橋 徹、松下正明：作家・北杜夫と躁うつ病 双極性障害の診断 . 病跡学雑誌、査読有、95 巻、2018、58-74

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

なし。

## 6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし。

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：松下 正明

ローマ字氏名：Matsushita masaaki

研究協力者氏名：鷲塚 伸介

ローマ字氏名：Shinsuke washizuka

研究協力者氏名：萩原 徹也

ローマ字氏名：Tetsuya Hagiwara

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。